★　★　★

とはいえ、いくら頑張ってみても、終わりのない介護はない。少し早いか、少し遅いかのちがいがあるだけだ。
思えば、戦後の余塵（よじん）くすぶる激動の時代から共生の光芒（こうぼう）６６年。
いま、８０歳台の後半を、なおも、
「生きてるうちは頑張らんとなあ」。

「生きることが
反戦平和につながれば
わたしは生きる
這いずろうともー。」　（八坂スミ）

わたし達も不屈に生きて、いつの日にか今生の二人三脚を立派にしめくくりたい。そして、わたしは、この人よりも一寸だけおくれて、
「人生万歳」。
と、つぶやいてから静かに目を閉じたい。

Ⅱおわり

あとがき

２０１６年５月２日。
有田和子は８７歳の誕生日を迎えた。　ちょうど、メーデーの回数と同じ年月を生きてきたこの人の現在は、文字どうり、「生への挑戦」の一語につきる。
２０１５年秋、二度目の脳梗塞につづく三度目の誤嚥性肺炎は、これまでで最も危険な状態だった。
「この一週間が山」、
と言われていた。が、通算６９日の入院・闘病生活をたたかい抜いて、みごとに生還した。
「生きてるうちは頑張らんとなあ」、
を、人生哲学にする人の驚嘆の生命力。
正直、この冬が勝負と考えていた。が、主治医の鈴木元先生はじめ関係者のみなさんの献身的奉仕にささえられ、桜花爛漫（らんまん）の春をおえ、さらに初夏へと向かっている。